

沖縄南米移民の動機と背景

—沖縄本島本部町における生活史的覚書—

水谷史男

1. はじめに
2. 沖縄からの南米移民の歴史的経緯
3. 本部町からの移民とその家族
4. 沖縄からのアルゼンチン移民の生活形成
5. とりあえずのまとめ

1. はじめに

かつての日本は、海外への移民や出稼ぎを輩出する国であった。第2次世界大戦の敗戦国となったことによって、一時移民の流れは停止したが、海外移民が再開された1950年代から60年代までは再び南米を中心とする各地に多くの人々が夢を求めて渡航し、それぞれの生活を築いていった。しかし、日本が経済復興から高度経済成長を達成し、国内での雇用機会の増大と生活水準の向上にともない、海外移民は急速に減少した。国境を越える移民という現象は、これまで世界各地で発生し、その実態や経済的・社会的影響について欧米を中心とする海外ではさまざまな社会科学的な研究が行われてきたが、戦後の日本では高度成長以後の各種の国内問題に関心が集まり、海外移民はいわば忘れられたテーマだったといえよう。

1980年代後半から日本が外国人労働者を受け入れはじめ、さらに日系人出稼ぎ労働者が多く流入するようになったことで、移民問題は逆の方向から注目されるようになった。つまり受け入れる側の国内問題として意識されるように

なった。それはまず海外からの単純労働力移入の是非が問われ、次に外国人出稼ぎ労働者とその家族の定着をめぐる問題に展開し、外国籍出稼ぎや移民が集住する地域社会の問題に広がった。他方で、日系人の故郷である南米、あるいは北米の日系社会への歴史的関心も呼び覚まされることになったが、かつて日本から出て移民となった人々とその子孫について、一般の日本人はほとんどその歴史と実態は知らないのが現状である。最後の南米集団移民が渡航してから、すでに40年近くが経とうとしている現在、移民1世の経験は高齢化とともに失われる恐れがある。

われわれは社会学的な研究の対象として、この日本からの移民を捉えようと考えているが、とくに注目しようと考えているのは、とりあえず3つの点にある。第1に、どこにいたどのような人たちが、どこを目指して移民に出て行ったのか、まずは地域別の移民送出の時系列的な実態把握である。送出地側の実態と移民先での経験は、それぞれ時代状況を強く反映すると思われるから、移動には地域的な要因と時間的な要因がともに作用している。とくに日本からの移民は、長期にわたる戦争という時代を挟むことで、大きな国際環境の変化の影響を受けた⁽¹⁾。

第2に、それぞれの時点で移民という選択に作用した諸条件がどのようなものであったの

か、という問題であり、これにはプッシュ要因とプル要因の双方をみなければならない。そして最終的には当事者である移民を経験した人々の、みずからの移民経験への意味付けが問題になる。現時点での評価は、事後的なものであるから、移民で現地に定着した場合も、帰国した場合もそれぞれの時点で、将来に何を期待し、どこでそれを修正したのが問題になる。

そして第3は、移民や海外出稼ぎという現象が、当事者だけでなくその家族・親族、さらに地域社会に対していかなる社会的効果を与えたのか、あるいは与えなかったのか、という問題である。これを捉えるには長期間の変化の中で移民渡航先の社会との関係とともに、出て行ったもとの土地、そこに残っていた親族や地域社会との関係をみなければならない。日本からの海外移民は、初期は単独渡航もあったが、その後は組織的に移民船を仕立てた集団移民や、家族単位で親族や同郷知人のつてを頼って移民する場合が多かったとみられる。相互扶助的ネットワークの存在が、移民という現象にどのくらい重要な意味をもっていたのか、が問題になる⁽²⁾。

これらの課題を、今の時点で実証的に追求しようとするれば、移民先の日系社会で生きてきた一世の人々と、帰国した人を含む日本に残っている人々から過去に関する事実について聴き取る必要があるだろう。日本人会、県人会等の日系社会組織が、これまでも多くの移民の人々の記録を集めてはいるが、個人の体験談の集積は貴重なだけに系統的・学術的な価値のある分析が必要である。その際、ひとつの注目点は、移民が多く輩出した特定の地域に絞って、個人単位、家族単位の記録だけでなく、村落レベルの移民経験を分析することがとくに意味があると考えられる。

本稿では、以上のような視点から、戦前・戦

後を通じて海外移民、とくにブラジルやアルゼンチンへの移民を多く輩出した沖縄本島の北部、国頭郡本部町におけるわれわれの調査の中間報告として、村落単位の移民移動の実態についていくつかの予備的な調査の結果をもとに考察する。

2. 沖縄からの南米移民の歴史的経緯

日本から南米への組織的集団移民の最初とされる1908年の「笠戸丸」移民を基点に、昨年(2008年)南米移民百周年を祝う行事が行なわれた。しかし、それ以前にも南米に渡った日本人は少なからずいたのである。現在信頼できる統計は少ないが、たとえば戦前に中南米に渡った日本移民の年次ごとの国別の渡航数について、海外移住事業団が昭和44年10月に公表した「海外移住統計」に具体的な数字がある(表1)。それによれば、明治25年から39年までにメキシコに7255人、ペルーに1770人が渡ったことになり、アルゼンチンとブラジルは不明だが、その他も合わせると9279人という数字になっている。そして「笠戸丸」以降、毎年500~千人の日本人が南米に渡ったということになる。

1941(昭和16)年までに渡航した総数は、242,982人を数え、この形での移民のピークは、1933(昭和8)年、1934(同9)年の年2万人以上であるが、国別にみると77%がブラジル、次がペルーの12.9%となっており、メキシコ、アルゼンチンは少ない。ただし、これは最初に渡航した国の数字であり、現地に行ってから移動した人々も多いことを考慮に入れなければならない。

国策としての南米移民は、戦前の場合、移民会社などを通じて家族ぐるみ募集し、移民船に集団で乗船して、現地では用意された農場などで契約に基づき労働に従事するという形を取った⁽³⁾。

沖縄南米移民の動機と背景

表1 アルゼンチンの日本移民（中南米諸国の比較） 1907－1941

西暦	年号	アルゼンチン	メキシコ	ペルー	ブラジル	その他	計
1892－1906	明治25－39	0	7255	1770		254	9279
1907	40	1	3825	85	－	4	3912
1908	41	0	0	2880	799	－	3679
1909	42	1	2	1138	4	－	1145
1910	43	2	5	483	911	－	1401
1911	44	2	28	456	－	8	494
1912	大正1	16	16	714	2859	1	3606
1913	2	103	47	1126	6947	27	8250
1914	3	41	35	1132	3526	9	4743
1915	4	33	19	1348	39	10	1449
1916	5	135	22	1429	35	96	1717
1917	6	127	53	1948	3883	39	6050
1918	7	134	128	1736	5956	37	7991
1919	8	174	64	1507	2732	52	4529
1920	9	42	53	836	970	44	1945
1921	10	53	69	717	970	127	1936
1922	11	52	77	116	986	32	1263
1923	12	66	68	333	796	14	1277
1924	13	58	76	651	3689	28	4502
1925	14	139	160	922	4908	164	6293
1926	昭和1	182	336	1250	8599	161	10528
1927	2	262	319	1271	9625	84	11561
1928	3	387	353	1410	12002	64	14216
1929	4	430	249	1585	15597	155	18016
1930	5	489	434	831	13741	187	15682
1931	6	362	283	299	5565	108	6617
1932	7	239	149	369	15108	28	15893
1933	8	135	85	481	23299	31	24031
1934	9	112	80	473	22960	38	23663
1935	10	201	53	814	5745	155	6968
1936	11	349	－	593	5257	44	6243
1937	12	306	65	99	4675	278	5423
1938	13	288	38	177	2563	132	3198
1939	14	187	67	223	1314	146	1937
1940	15	183	67	111	1564	69	1994
1941	16	124	28	21	1277	88	1551
合計		5418	14605	31337	188901	2724	242982
構成比率		2.20%	6.00%	12.90%	77.70%	1.10%	100%

出典：「海外移住統計」海外移住事業団 昭和44年10月

1892年メキシコ移住開始

1908年ブラジル移住開始（笠戸丸移民）

戦前移民は、ハワイに始まりアメリカ合衆国やカナダなどへの北米、メキシコ、そしてアメリカへの移民制限にともない先行するペルー、契約移民を多く受け入れたブラジルと南米諸国に広がっていった。移民の出身地は、日本各地に及ぶが、最初は広島県、山口県など中国地方、これに続いて和歌山県、鹿児島県などとならんで沖縄県からの移民は、大きな比率を占めていたとみられる。正確な数字については戦後のも

のしかないが、ここでは沖縄からのアルゼンチン移民の状況をうかがい知ることのできるものとして、日本政府が渡航費を補助した沖縄出身者について海外移住事業団と琉球政府によって残された資料からみたものが表2である。

これによれば、戦後沖縄が米軍統治下に入ってから、移民が再開された1948年以後、日本本土復帰以前の1970年までの沖縄出身者でアルゼンチンに渡航した数は3,000人を超える。この中

表2 沖縄からのアルゼンチン移住者数 1947-1970

年度	日本政府が渡航費を補助した者①	沖縄出身者自費渡航者②	沖縄出身者で琉球政府が渡航費補助③	沖縄出身者で日本政府の渡航費補助④	沖縄出身者計 ⑤(②+③+④)	日本政府永住旅券発給数⑥
1947 (S22)						
48 (S23)		33			33	
49 (S24)		118			118	
50 (S25)		303			303	
51 (S26)		653			653	53
52 (S27)		270			270	98
53 (S28)		204			204	16
54 (S29)		193			193	34
55 (S30)	113	258			258	147
56 (S31)	14	144			144	55
57 (S32)	66	206	13		219	117
58 (S33)	35	123	15		138	74
59 (S34)	166	115	21		136	140
60 (S35)	26	46	16	6	68	45
61 (S36)	56	92	10	8	110	91
62 (S37)	124	70	2	7	79	170
63 (S38)	193	49		36	85	206
64 (S39)	147	48		48	96	147
65 (S40)	157	37		57	94	177
66 (S41)	188	29		116	145	190
67 (S42)	158	9		88	97	130
68 (S43)	137	5		73	78	70
69 (S44)	131	4		49	53	95
70 (S45)	146	1		82	83	74
計	1857	3010	77	570	3657	2133

* 沖縄県民の旅券は1967年9月中旬から日本政府(南方連絡事務所)より発給しているが日本の旅券統計には含まれない。

* ①は海外移住事業団資料、②③④は琉球政府資料、

* ⑥の70年度分は1~11月分である。

には、自費渡航者、琉球政府が渡航費補助をした者、日本政府が渡航費補助をしたものが含まれる。戦後の沖縄の状況が、きわめて厳しいものであったことから、沖縄の人々の生活保障にとって移民は生活再建のひとつの大きな可能性であったことと、戦前に南米に移住していた人々が多かったことで、家族親族の呼び寄せが可能だったことと、日本から切り離されてしまった沖縄を、渡航費援助という形で日本政府も援助していたことがうかがわれる。

沖縄からの南米移民は、沖縄各地から出ていると考えられるが、数の上で多いのは沖縄本島で、宮古、八重山など南の離島地域からの海外移民は少ないとみられている。沖縄本島とその周辺では、移民を出している地域はほぼ全域にわたるが、特に目立つのは中城、金武、勝連、今帰仁など中部から北部にかけての村落である。次節では、今回われわれが調査を行った国頭村本部町および今帰仁町に焦点を絞って、そこからアルゼンチンに渡航した移民と、帰還者を中心に聴き取り記録を参考にしながら予備的な考察を試みたい。

3. 本部町からの移民とその家族

本部町は東経127度54分、北緯26度39分にあり、沖縄本島中部、本部半島の先端に位置する。西の洋上には伊江島をはじめ、北方には伊是名島、伊平屋島を望む地形の変化に富む地域である。沖縄戦では、伊江島に米軍が上陸したことから、町全域が戦場となり壊滅的な打撃を被り、アメリカ軍の占領後、町民は大浦崎へ移動させられ、苦難の時を過ごした地域でもある。東南に名護市、東北に今帰仁村と隣接しており、現在は名護市を中心とした北部の人口集中地域のひとつとなっている。2006年現在の世帯数は5,796、人口は住民基本台帳の数値で7,214人となっている。

全般的に険しい地形を持つ本部町は、八重岳、本部富士等の丘陵が起伏しながら連なり、海浜まで裾野を広げ、名護、今帰仁との境界をなしている。平野には満名川が流れ、古くは流域に開けた低地を満名タープクと呼び、稲作地帯が広がっていたといわれる。15世紀初頭まで続いた中世の三山時代は、1416年の北山滅亡によって、中山の尚巴志によって作られた琉球王朝に組み込まれた。1666年に伊野波間切⁽⁴⁾が新設されるまで、本部半島の大半は、今帰仁間切に属し、その翌年には伊野波間切は本部間切に改称された。本部町域の王府時代の村は合併を繰り返し、明治41年に本部村、昭和15年に町制が施工され本部町となった。

本土復帰後の1975年には、沖縄海洋博覧会の会場となり、その後跡地に「美ゆら海水族館」などの観光施設と大型ホテルが立地して、現在は国内外からの観光客を集めている。本部町の山間部にある伊野波は、本部町発祥の地として知られ、寛文6（1666）年、今帰仁間切より12村を分離して伊野波（ヌファ）間切を新設したときの主巴であり、番所が置かれたとい⁽⁵⁾。

本部町の移民との関連を考えると、戦前に南米、とくにペルーやアルゼンチンへの移民を出していたことから、戦後も家族・親族の縁を頼って渡航する呼び寄せによる移民が多く出ていたことが確認できた。以下での考察のもとになった移民データは、アルゼンチンでの沖縄県人会連合が移民100周年を記念する移民史編纂のため、現地で出身村落ごとに行ったアルゼンチン在住日系人のアンケートと、本部町在住のアルゼンチン帰還者であるI氏が個人的に作成された移民者家族のリストによって得られたデータにもとづいている。相互に一致を確認できない部分もあるが、本部町からアルゼンチンに移民した人々の詳細な記録として大変貴重なものである。

われわれの研究にとって、ひとつの焦点は、村落単位の移民の状況について、具体的に戦前および戦後に南米に移民した人々の社会的背景を探ることにある。つまり、濃密な地縁血縁の地域社会を形成していた人々のうち、どのような条件にある人がいかなる動機で海外移民を選択したのか、そして移民した結果として、海外に生活基盤を築いて定着した人々とその家族、そこを頼って移民しながらも結果的には戻ってきた人とその家族、さらに移民に出なかった人々が海外移民についてどのような評価をしているのか、などがとりあえず重要な着目点になる。

われわれの調査では、まだいろいろ不明な点も多いが、ここでは本部町および隣の今帰仁町を含め家族単位で海外移民をした人を追跡することで、その実態の一部を明らかにしたい。

まず、表3はアルゼンチンでのアンケートに

回答した本部町出身者の97家族について、出身地区(字)ごとのアルゼンチン渡航・入国時期(3区分)と世帯主出生年による年齢層(3区分)で分類してみたものである。

渡航の時期は、ほとんどが集団移民船に乗る形で渡航しているが、1910(明治43)年までと、1930~40年頃までの戦前移民、1950(昭和25)年以後の戦後移民で3区分してみると、明治期が10家族(10.3%)、大正時代以降の戦前期が47家族(48.5%)、戦後移民が28家族(28.9%)となっている。もっとも早い例は1905年4月、12歳で太平洋を渡り、チリに上陸、アンデスを汽車で越えて1919年2月にアルゼンチンに至り、1920年フロレンシオ・バレラで同郷の先輩と蔬菜園を共営。1933年にホセ・セ・パスの農園購入移転という経歴の人である。これは初期の特殊な例ともいえるが、もっとも遅い時期の渡航者は1967年7月、兄を頼ってテヘルベルク号に

表3 アルゼンチン移住の時期と年齢

地区(字)	家族数	渡航入国時期			年齢層			
		~1910	1930~	1950~	明治生まれ	大正生まれ	昭和生まれ	不明
伊豆味	17	1	15	1	9	7	1	
伊野波	5		2	2	1	3	1	
浦崎	7	1	4	2	2	5	0	
北里	2	?			1	1		
崎本部	14	3	5	6	5	4	5	
堅建	1			1		1		
謝花	2		2		1	0	1	
瀬底	2	1	1		1	1		
大賀陽	2			2			2	
豊原	8		4	2	1	2	3	2
並里	10	1	5	4	4	3	3	
浜元	4	2	2		2	1	1	
備瀬	2		2			2		
辺名地	4	1	1	1	1	1	2	
山川	17		4	7	4	3	7	3
合計	97	10	47	28	32	34	26	5
構成比%		10.3	48.5	28.9	33.0	35.1	26.8	5.2

「亜国沖縄県人会連合100周年アンケート」より筆者作成。

乗ってアルゼンチンに渡り、洗染業に従事した25歳の女性の例である。

移民（世帯主）の年齢層でみると、明治生まれが32名（33%）、大正生まれが34名（35.1%）、昭和生まれが26名（26.8%）となっている。全体的には、大正時代に重なる1930年代から戦争によって移民が止まる昭和15年くらいまでの渡航がもっとも多く、年齢層としては明治の末から大正生まれの世代に多く、戦後の移民は戦争と戦後の渡航が禁じられた時期を通り過ぎた昭和一ケタ世代とその妻や子どもたちが主体となっていたと考えられる。

字単位でみると、伊豆味、崎本部、山川、並里などの集落がアルゼンチン移民を多く出していることがわかる。伊豆味、並里は海から離れた山間部であり、崎本部、山川は海浜に面した地域である。字ごとの移民家族は、それぞれお互いに親族関係にある者が多く、呼び寄せ移民の形態が一般的であったと推察される。したがって、渡航後の現地での生活は、まず親兄弟のもとでその仕事を手伝いながら定着していったものと思われる。

以下の表4は、前期アンケートに記載された移民家族の代表者（単独の場合もあれば、家族同伴の場合もあるが）のうち、渡航時点が確認された86事例について、南米移住年順にその出身地と現地での職業をみたものである。

入国年月日の最初の入国名に記載がないのは、アルゼンチンに入国した例である。

86例のうち、76例は親族等の呼び寄せの形で、呼び寄せ人が確認できるものである。これによると、最初の1905（明治38）年渡航の1例は、安洋丸で太平洋を渡り、チリのバルバライソ上陸、アンデスを汽車で越えて1919年2月にアルゼンチンに入国、1920年フロレンシオ・バレラで同郷人と蔬菜園を共営。クティエレスポンテベードラを経て、1933年にホセ・セ・パスの農

園を購入したという経歴である。次の1918（大正7）年渡航の1例は、パセナ鉄工場に就業、1919年フロレンシオ・バレラの沖縄県人の蔬菜園で2年、1929年ビジャカルサダで独立経営13年間フライボレ移転14年間、1957年ブエノス・アイレスの所有地に移転し花卉園経営。3番目の1919（大正8）年の1例は、ブラジル契約移民としてブラジルに渡航し、そこから移動してパセナ鉄工場に1年8ヶ月就業、1921年フロレンシオ・バレラで蔬菜園、1924年ブルサコに移転、花卉園芸農園経営として定着した人である。

このように、初期の事例にはチリやブラジルを経由してアルゼンチンに定着するまでいくつかの土地を移動する形がみられるが、その後は沖縄出身者の呼び寄せが本格化して、はじめからアルゼンチンの親族や知人のところに移住する例がほとんどになってくる。

現地で就業した職業は、圧倒的に野菜作りの蔬菜園、花作りの花卉園芸、洗濯店の洗染業、それに皿洗いなどカフェ店従業員が多い。本部町出身者に限らず、蔬菜や花卉園芸といった大都市向けの農業と、都市部のカフェ店は、日本人がアルゼンチンで従事した職業の代表的なものであるが、初期は都市部のカフェ店を経営するまでに成功し日本からの移民を雇用した例もみられたが、カフェ店の仕事は沖縄からの移民には厳しい労働で、不況期に経営が苦しくなっていくとともに減少し、蔬菜や花卉栽培で農場を経営する例が増える⁽⁶⁾。後の事例でみるように、呼び寄せ移民の多くは、先に渡った父や叔父、兄や従兄弟などを頼って移民した例が圧倒的に多いが、単身で渡航する例よりも妻子を伴っていった場合の方が多くとみられる。笠戸丸以来、集団移民船による出国が夫婦や家族同伴を条件にしていたことから、単身では渡航が難しかった事情と、妻子がいる方が現地です

表4 本部町出身アルゼンチン移民家族の入国時点と現地初職 (86例)

	入国年月日	頭文字	出身字	現地初職	
1	1905.4.2	チリ	GS	崎本部	鉄工場、海岸労働、冷凍工場、労働、蔬菜業
2	1918.8.15		NK	伊豆味	蔬菜 花卉園芸
3	1919.8.30	ブラジル	SK	辺名地	花卉園芸
4	1927.11.10~12.29		TH	浜元	洗染業
5	1927.6.27		MS	並里	蔬菜園
6	1927.8.1		TJ	浦崎	蔬菜
7	1928.3.19		NZ	崎本部	蔬菜 花卉園芸
8	1928.6		YK	崎本部	蔬菜
9	1928.9.29		NK	浜元	足の矯正師
10	1929.12.17		YK	伊豆味	蔬菜
11	1929.2.8		SG	瀬底	花卉園芸
12	1930.11.17		IS	伊豆味	蔬菜、グラジオス栽培 (サンタフェ) その後出づ花卉
13	1930.2.27		YC	山川	蔬菜園、洗染業
14	1930		YC	山川	蔬菜園、カフェ店
15	1931.1.13		OY	並里	1965隠居生活
16	1931.5.13		NS	伊豆味	花卉園芸
17	1931.5.13		GS	崎本部	蔬菜業
18	1931.5.15		YT	崎本部	洗染業、運転手、洗染業
19	1931.6.12		KK	伊豆味	蔬菜園、花卉園
20	1931.9.4		YS	伊野波	蔬菜、花卉
21	1932.6.9		SJ	伊野波	花卉園芸
22	1933.6.1	ボリビア	FS	伊豆味	雑貨商 花卉業
23	1934.1.7		TN	浦崎	カフェー店経営 花商
24	1934.11.20		MM 女性	伊豆味	花卉園
25	1934.7.7		NS	伊豆味	花卉園芸
26	1934年		FS	伊豆味	花卉業
27	1935.1.7		TS	浦崎	蔬菜、洗染
28	1935.1.7		TG	浦崎	蔬菜、洗染
29	1935.10.21		TJ	並里	花卉、洗染業
30	1935.11.5		YS	伊豆味	蔬菜、花卉
31	1935.2.1		NK	伊豆味	洗染業
32	1935.5.5		IU 女性	伊豆味	蔬菜園、花卉園
33	1935.7.4		TS	山川	蔬菜園芸業 洗染業
34	1936.1.5		SY	伊野波	花卉園芸
35	1936.10.30		NK	伊豆味	洗染業
36	1937.2.4		KH	伊豆味	牧畜 蔬菜 花卉
37	1937.2.4		SK	辺名地	花卉園芸
38	1937.4.9		YS	伊豆味	蔬菜、花卉
39	1937.9.27~11		NK	浜元	床屋 洗染業
40	1938.11.6		NS	崎本部	
41	1938.12.28		NS	伊豆味	花卉園芸
42	1938.12.28		MK	並里	蔬菜園、洗染業
43	1938.3.26		TS	浦崎	蔬菜、洗染

沖縄南米移民の動機と背景

44	1939.7.10	MS	並里	農園、花卉園芸
45	1940.4.26	GS	崎本部	蔬菜業
46	1940.4.26	YC	備瀬	蔬菜、カフェ、レストラン、その後洗染業
47	1940.8.7	YC	備瀬	蔬菜、カフェ、レストラン、その後洗染業
48	1940.9.9	TH	浜元	洗染業
49	1941.1.22	YC	山川	洗染業
50	1941.7.29	YC	山川	洗染業
51	1941.8.21	TZ	謝花	洗染
52	1941.8.22	SM 女性	瀬底	花卉園芸
53	1941 ボリビア	KS	豊原	カフェ店、織物、洗染業
54	1941 ボリビア	KS	豊原	カフェ店、織物、洗染業
55	1942 ボリビア	KS	謝花	
56	1942 (ペルー1922)	YS	並里	カフェ、Almacen, 蔬菜パナダリア
57	1949.7.29	KS	豊原	洗染業
58	1949.29	KS	豊原	洗染業
59	1950.10.15	GS	崎本部	花卉園蔬菜業
60	1950.10.15	GS	崎本部	蔬菜 花卉業
61	1950.11.21	NZ	崎本部	蔬菜 花卉園
62	1950.11.22	YT	崎本部	洗染業
63	1951.11.23	SM	伊野波	花卉園芸
64	1951.5.17	TS	大嘉陽	洗染業、食料品店、洗染業
65	1951.5.17	HR	並里	ラジオ・テレビ製作修理 洗染業
66	1951.5.17	SK	辺名地	花卉園芸
67	1951.5.17	YC	山川	洗染業
68	1951.5.2	MK	伊豆味	農園 花卉園芸
69	1951	TS	山川	洗染業
70	1951.9.19	YC	山川	洗染業
71	1952.4.18	KS	大嘉陽	洗染業
72	1952.6.29	YK	並里	洗染業、パン屋就労、洗染業
73	1952 ブラジル	TY	並里	
74	1953.10.12	YT	崎本部	花卉
75	1954.10.14	SM	伊野波	花卉園芸
76	1954.6.13	KN	堅建	洗染業
77	1955.11.13	TS	並里	花卉
78	1955.12.20	YS	豊原	洗染業
79	1955.2.10	NM	崎本部	蔬菜 花卉園芸 切花 鉢物栽培
80	1956.3.17～5月	TY	浦崎	花卉園芸業
81	1957.2.10	YC	山川	蔬菜、洗染業
82	1958.7.19	TY	浦崎	花商
83	1962 ペルー	IS	豊原	無職
84	1962	YC	山川	洗染業
85	1967	YK	山川	無職
86	1967.7	IY	山川	洗染業

「亜国沖縄県人会連合100周年アンケート」より筆者作成。

ぐに労働力として役立つことを期待されていたと考えられる。

ここで考えてみたいのは、移民を実行した人たちの血の繋がる家族および親族がもっていた意味である。初期の移民が、比較的若い世代の単身者あるいは若い夫婦で、生活の向上と新たな可能性を求めて海外渡航を選び、現地で苦勞の末ある程度の成功を達成した後に、故郷に帰ってくる意図を持っていたことは、多くの移民の語るところである。少なくとも主観的には、海外移民は永久に国を捨てるようなものではなく、故郷にいては得られないチャンスと金銭を手にすることが目的であったと推測される。つまり当事者が出国するときは「出稼ぎ」が目的であって、永住しその国の国民となる「移民」は意図されていなかった。しかし、実際に移民した人々の多くは、さまざまな事情と社会的背景から故郷に戻ってはこなかったことも、明らかな事実である。

だが、帰ってきた人もいなかったわけではない。では、なぜ戻ってきたのか？所期の目的を達成して故郷に錦を飾った帰国であったのか。それとも、別の理由があったのか？この点を、実際に移民し帰還した人へのインタビューを通じて明らかにしようというのが、われわれのひとつの狙いである。とくに、沖縄からの移民の場合、移民と帰国という行為選択にどのような要因と動機が作用していたのか、それがここでの問題である。

4. 沖縄からのアルゼンチン移民の生活形成

以下では、われわれが行った本部町と隣の今帰仁町における聴き取り調査の記録の中から、アルゼンチン移民の2つの事例を中心に、移民の動機と沖縄に帰還した背景について、若干の考察を行うことにする。どちらも戦後のアメリカ占領下に、戦前に移民していた家族に呼び寄

せの形で移民し、数十年をアルゼンチンで過したのち、沖縄に一家で帰ってきた人である。

(1) I氏の事例：

I氏は1926(大正15・昭和1)年生まれで現在満83歳。高齢で、月に二三度は病院に通っている身だが、眼鏡なしで小さな字も読め、きれいな字を書き、言葉ははっきり話されて、思考も体の動きもとてもお元気に見える。座敷には大きな座卓と座椅子があり、机の上にはアルゼンチン関係の書類や書籍、ノートなどがたくさん積まれている。筆者がブエノス・アイレスに去年行って沖縄県人会連合などに寄ってきたと話すと、スペイン語の単語や地名を交えて語り始めてくれた。

*昔の本部と伊豆味について：《子供のころ：戦前の話》

一この伊豆味というところからはたくさん南米移民が出ている。伊豆味以外にも本部には戦前は13の字(地区)があった。ほとんどの字から海外移民が出ていると思う。戦前の沖縄は貧しくて、とくにこの本部半島や国頭など北部は食べるものも満足にないような村が多く、小学校まで通うのも山道を2時間歩くようなところだった。常食はサイツマイモで、田んぼもあったがコメは売るためのもので、ブタも飼っていたが普段は食べられない。ただうちは伊豆味では一番大きな家で、父親は農地を広く持っていたので区長などをつとめていたが、戦争中は日本の軍隊が宿舎にしている、子供のころ家の中に兵隊がたくさんいたのを覚えている。ここは海から離れた内陸なので防衛部隊がいた。

*家族のことと学校のこと：《戦争中の話》

一きょうだいは全部で10人で、自分は一番末っ子で七男。一番上の長男(1907年生まれ、I氏とは21歳違い)が戦前にアルゼンチンに渡航した。21歳の徴兵検査で兵隊にとられるのを避けるため南米移民に行ったらしい。まだ戦争がひ

どくなかったので、割合簡単に行けたらしい。続いて何人かの兄も行った。自分は小学校を出てから、那覇の水産学校（県立沖縄水産学校、今は糸満にある県立の水産高校の前身）に進学した。村で上の学校に行けたのは数人しかいなかった。学校は漁業の船乗りになる水産科と船を造る機関科があって、自分は船に乗る気はなかったので機関科の方だった。学校は那覇の港近くで楽しかったが、戦争がひどくなって1945年の沖縄戦までは、勉強より軍に動員されて働いたり、最後は18歳で軍と一緒に戦う「鉄血勤皇隊」の少年部隊に入れられて、米軍の侵攻に備えて本島中部に移動したが、南部の方に行った生徒はほとんど死んだと思う。

一父は戦争の前に亡くなっていた（1937年）が、本部に残っていた母や妹は本部半島に上陸してきた米軍に撃たれて死んだという話を後で知った。この上にある山が艦砲射撃の目標になっていたもので、最初は上空からの焼夷弾でほとんどの家が焼かれ、最後は軍艦からの射撃で海岸一帯はほとんど破壊された。自分は中部の山中を移動して、どこを歩いていたのかもわからなかったが、結果的にはそれで命は助かった。

***移民に至るまで：《戦後の話》**

一戦後は本部に戻って、伊豆味で細々農業をやっていたが生活はかなり苦しかったので、結婚した妻と二人で自分の意思で1951年9月17日、兄のいるアルゼンチンに呼び寄せ移民として渡航した。アルゼンチンでは兄のいるブエノスアイレス州のブルサコで、最初は農業労働者として働き、やがて自分の農場をもてるようになるまで頑張った。温室には電照（＝電灯で植物を照らす装置）を設置して、栽培した花をブエノスアイレスなどの都市向けに出荷した。スペイン語はまったく話せなかったが、働きながら自分で文字と会話を覚えていった。むこうで息子が2人（1952年、1956年出生）娘が一人

（1954年）生まれた。アルゼンチンで子供が生まれると、2週間以内に日本大使館に届ければ日本との二重国籍が可能だが、アルゼンチンには子の名は漢字は使えず、スペイン語の名前でないと受け付けてくれないので、みんなあちらの名前を付けた。子どもたちは家では日本語、学校ではスペイン語を使うことになる。

一当時の沖縄の生活・給料から比べると、アルゼンチンでは4～5倍は稼げたから、アルゼンチンは悪くないところだと思った。仕事は温室で花を作る花卉栽培（カーネーション、クラベル＝グラジオラスのこと、キクも作った）が軌道に乗り、兄が10ヘクタール、自分が10ヘクタールの農場で花作りをするまでになった。渡航10年目の1961年には生活も安定し、トラクターと自動車を買ひ、家も大きくなった。アルゼンチンでは日系人、とくに沖縄県出身者（県系人）の結びつきは強く、本部町出身者が作る本部沖縄県人会での同郷者の交流は親密で、みんなで助け合いよく集まってアサド（焼き肉パーティ）をした。アルゼンチンは牛肉が豊富で安いのですっかり肉食になった。

***戻ってきた理由：**

一日本に帰る気はなかったが、マルビナス戦争（＝フォークランド紛争・・・1982年アルゼンチンとイギリスがアルゼンチン沖のフォークランド島の領有をめぐる争った戦争、イギリスが勝利した）のころ、アルゼンチンが不況になってきたことと、うちの一族の事情で沖縄に帰ることにした。事情というのは、I家のトートーメ（沖縄の祖先を祀る位牌のこと、それを祀る仏壇も指す）を誰が守るか、ということ。一族のトートーメは子孫の誰かが、その土地で守っていかねばならない。本来は長男にその役割があるのだが、I家では、長男が早く海外へ出てしまったので、次男が残って継ぐことになっていたが、次男には子供がいなかった。自分が沖縄

に戻って一族のトートメを守るしかないか、
と思い、まず単身で30年ぶりに本部に戻って村
の様子を見た。

—正直な感想として、沖縄はすっかり変わって
しまったと思った。経済的には豊かになったと
もいえるが、昔の沖縄がもっていた祖先や伝統
を大事にする精神は失われ、村の人々が一緒
に助け合って暮らす生活は、自分のことばかり考
える金と欲の優先する人間関係になっている。
アルゼンチンの日系人社会に今も続いている親
密な関係が、今の沖縄にはなくなってきてい
る。自分の故郷ではあるが、もう昔の沖縄では
ない。

—とはいえ、自分が戻らなければ先祖のト
ートメを守る者はいない。悩んだ末、結局アル
ゼンチンを引き払い、妻と息子二人を連れてこ
こに戻ってきた。あちらで蓄えた財産を持ち
帰ったが、為替レートは逆転していて父の残し
た農地で農業をやることにしたが、生活は苦し
くなった。息子たちはこちらで仕事を見つけ、
家から通って働いているが、まだ結婚はしてい
ない。今は高齢になり身体も病気がちなので、
仕事はやめ、妻も日用品を売る商店をやっている
が、利益はほとんどなく暇つぶしのようなもの
だ。

*生きがいとしての系譜作成：

—自分は、戦争の時代を沖縄で過ごし、戦後30
数年をアルゼンチンで暮らし、また沖縄に戻っ
てもう20数年が経って、もうあといくら生きら
れるかわからない身だが、今毎日生きがいとし
てやっていることがある。それは、自分の一族
と、この伊豆味を含む本部の字からアルゼンチ
ンに出て行った人々の家族ひとりひとりを記録
し、正確な系図・名簿を作ることである。どの
家が、どんな先祖とどんな子孫がいたのかを確
認し、そのすべてを記録して、子孫たちに伝え
残すことを使命だと思っている。自分がこれを

やっておかなければ、すべては忘れられてしま
う。

—I家の先祖は、琉球王朝に仕えた親方（江戸
時代の武士・士族にあたる身分）で、かつては
首里に住んでいたが、明治維新とその後の琉球
処分⁽⁷⁾によって本部半島の山間部、伊豆味に移
住した。その先祖の系譜は、門中⁽⁸⁾のひとつと
して中世の豪族にまでつながる。（I家の系図
を広げて説明してくれた。江戸時代の武士が、
明治維新で藩主から支給されていた秩禄を奪わ
れ、生活の基盤を失って武士の商法をして苦労
したことと似ている）

—自分はこの数年間、本部の村中を訪ね歩いて
確認し、ここから南米など海外に出て行った人
たちを含め、その先祖と子孫の名簿を作ってい
る。（細かくノートに書かれた記述を見せてく
れる。誰がいつ生まれ、その妻子が何人いて名
前は何といい、亡くなった人はいつ死亡したの
か、アルゼンチンで生まれた子供は何人で名前
は何というのか、アルゼンチンに電話で問い合
わせて確認したという。それぞれの家単位に、
誰が誰の親で親族の系譜はどうなっているか
が、細かい字で記入されている）まだ完全には
わかっていない部分もあるが、これを死ぬまで
に完成させたい⁽⁹⁾。

聴き取り記録を整理してみると、どうしてアル
ゼンチン移民を選んだのか、移民した先での
生活の具体的な問題、帰ってきてからの生活な
どについて、いくつか確認できることがある。
まず、アルゼンチンへの移民を選んだおもな理
由は、長兄が戦前にアルゼンチンに渡り向こう
で農園を営むまでに生活基盤を築いていたこと
と、沖縄戦で壊滅的な打撃を受けた戦後の沖縄
で生きていくことが極めて厳しい状況にあった
ことが大きな理由である。それでも、アルゼン
チンに永住する意思がI氏にあったとはいえない。

しかし、インタビューからうかがわれる印象では、I氏にとってアルゼンチンでの生活は苦しい時期もあったものの、おおむね楽しく幸福なものであったように受け取られる。親族や同郷の人々とは頻繁に交流し、自分の土地と家をもって安定した生活を確保し、子どもたちの成長も順調であったことから、言葉も文化も違う異国ながらアルゼンチンという国への愛着は言葉の端々からうかがわれた。このことから逆に、現在の日本あるいは沖縄への評価は、どちらかといえば批判的な評価をI氏は語られた。

そこで、なぜ故郷に帰ってきたのか、という点が注目される。移民に出る時にいずれは戻ってくるという「出稼ぎ」意識があったとしても、アルゼンチンでの生活を経ることで永住の意思は強まったと思われる。本部には両親はもう亡くなっていて、唯一の兄が残っていたが子どもはいない。一族の拠点はアルゼンチンにあり、そこにいる限り親族や同郷者との相互扶助的ネットワークもある。しかし、I氏は帰国を選んだ。インタビューで語られた言葉から判断する限りではあるが、故郷への帰還の一番の理由は、つまるところ門中⁽¹⁰⁾のトートーメの維持という伝統的な家意識、琉球王朝の士族であった祖先と子孫への血の継承、一族の誰かが伊豆味という場所で先祖の位牌を守らなければならない、という使命感である。

このような伝統的慣習は、家ごとの子どもの名前に決まった文字を使う中国文化由来の「名乗り頭(通字)」という規則を移民たちが守っていることに象徴される。I氏が熱心に取り組んでいる名簿づくりへの情熱も、江戸時代以来の系図を持っている親方士族への誇り、に根ざしている。移民という社会現象に、このような伝統的な要因が働いていることは社会的にはとても興味深いのが、これはI氏に特有のことで、一般の沖縄の人にはそこまでの強い家意識・先

祖崇拜はないのではないか。また現在の沖縄の現状(あるいは今の日本の現状といってもいいが)への批判的な視線は、海外日系人移民1世にはかなり広く見られると思う。それを単に戦前に教育を受けた人々の名残りとするだけでは、問題の半分しか見ていないと思う。

次に、もうひとりわれわれが2009年9月に今帰仁町でインタビューしたアルゼンチン移民から帰還したN氏の記録をみてみたい。

(2) N氏の事例

N氏は今帰仁町で1927(昭和2)年に生まれ現在満82歳。戦後の沖縄でバスの運転手をしてきたが、兄弟が多く結婚した妻(1928年生まれ81歳)の両親が戦前にアルゼンチンに渡っていたことで、呼び寄せ移民として28歳のとき1955(昭和30)年に子ども3人を連れ一家でアルゼンチンに渡航した。アルゼンチンでは、ブエノスアイレス北方のマルコ・パスで蔬菜栽培をしていた妻の両親のもとで農業に従事し、10年目に自分の土地を持ってカーネーションと菊の栽培をした。20年アルゼンチンで暮らし、1975(昭和50)年に本土復帰後の沖縄に一家6人で帰ってきた。N氏の両親はまだ健在だったので、N氏一家は那覇近郊の食品スーパーなどで働き、さまざまな職を経て、両親が亡くなった現在では、今帰仁の自宅で食品製造の店舗を構え、独自に工夫したソーセージを製造して元気に暮らしている。

*移民した理由:(インタビュー記録から抜粋)

〔あの当時、ブラジルやボリビアなんかに行った人は、みなさんずいぶん苦労されたといいますが、アルゼンチンに行った方は・・・〕

—アルゼンチンにあの当時行った人はみんな親戚や誰かに呼ばれて行ったので、そんなに苦労はしてませんよ。呼び寄せた人は、寝台とかそういうのも全部準備して呼び寄せるんですか

ら、生活費も毎月あるし、呼び寄せで行った人は苦勞してませんよ。

〔行く前にアルゼンチンに来なさいという話があったんですか?〕

—私たちは希望して行ったんですけどね、親父はこっちに来るもんじゃない、長男だし、くるもんじゃないと言われて・断つて。私は10人兄弟の三番目ですから、妹がたくさんいるんですよ。弟も。そのとき私はバスの運転手で3800円の給料取って2000円は家に入れても、残り1800円で生活していて、あんまり苦しいもんだからアルゼンチンで一儲けしようと、呼んでくれと手紙出して。呼んでくれと言っても来るなと。仕方ないから来るなと言うんならボリビアでも行こうかと言ったら、あっちに行くぐらいならこっちにおいでと (笑)。

—あの頃は自分も結婚して、弟も結婚して一つの家で15名一緒に暮らしていた。

N氏の場合、自分から移民を望んで呼び寄せ移民に行った第一の理由は、戦後の沖縄で大家族を支える生活の苦しさであったと思われる。沖縄で頑張っている、自分一人の力で親兄弟を養うことは困難で、妻の両親が暮らしているアルゼンチンに行き一儲けしてこようと考え、呼び寄せてくれるように頼んだが、長男であるということで反対された。

*アルゼンチンの生活:

〔誰かが家督を継いで、外国に出ても帰ってこないといけない。何年かしたら帰ってくると。間に戦争があったということはありますが、帰ってこないということもありますか?〕

—ありますよ。戦前にむこうに行った人は10名のうち9名は次男三男。ほとんど長男は行ってません。二男三男はむこうに永住しても問題ないですけど、長男だと沖縄の習慣として家督を

継がなきゃいけないから。向こう行ってそれになまやさしいことではなかったですね。ほんとう言っ。私行く前はバスの運転手で、それを辞めていったもんだから、1日中運転だけしてるから足腰もなにも使わないでしょ。向こうに行き農業するってほんとに泣きましたよ。もう足から腰から、もう100メートルありますから。ちょうど一町歩区切りでやっていますから。で、何を植えるとしても100メートルぐーと真っすぐ植えて、これを鋤でこうやりながら草取りながら行くでしょ。一日中腰曲がっていますから。

*腰に負担もすごくかかりますね。

—はい。

*むこうの野菜の仕事は1年じゅうあるんですか? 1年じゅう忙しい?

—はい。あっちの気候としては、冬は沖縄よりちょっと寒い。野菜作りでも、冬もの夏もの。いろんなものを作るんです。

*できた野菜を町まで運んで・・・

—市場で野菜を持って運転して行って売って、一晩泊って売った分を計算して帰るわけです。

*1泊しないとイケないんですね。

—はい。

アルゼンチンの農場での労働は、厳しいものであった。しかし、妻の両親がいて、既に用意された生活の中でN氏は着実に土地を手に入れ、花卉栽培で生活の安定を手にする。4人の子もたちも現地の学校に行き、順調な家庭を営むにいたる。しかし、20年を経過して一家は沖縄に戻ることにした。

*戻ってきた理由:

〔こちらに戻ってきたのはどういう理由で?〕

—私たちの家は沖縄の尚質王という王様の下で13代から14代続いている、ここの長男だからど

うしても帰ってこないといけない。また、渡るときに10年で金持ってきて成功したら帰ってくると、そういう約束で。

〔じゃ、始めから10年したら帰ってくるつもりだったんですか?〕

—そういう約束で行ったんですから

〔でも結果的には20年いることになったと・・Nさんはご長男で、いずれはこちらで家の跡を継ぐということで・・。そういう方はかなり多いですか?このへん、今帰仁の中では。行って何年かしたら帰ってくるという・・〕

—多いですよ、でもあまり帰ってくる人はないですね。こっちから若い時に行くとか向こうで結婚して子供も生まれる。子どもはアルゼンチンのスペイン語教育を受けてますから。自分たちもずいぶん反対しましたよ。帰ってくるの。

—4名の子どもたちは、高校も出て、長男は。年頃になって引き揚げてくるというのは、子どもたち全部日本語はわからないし字も読めないし。こんなもの連れてくるなんて私は犠牲になってもいいけど、子どもたちは犠牲にしたいから帰りませんと言ったんだけど、あんた犠牲というけど、沖縄の習慣で長男が家督を継がないといけないでしょ、あんた家督を継がんで向こうで幸せになれると思うの、絶対幸せにできないから帰ってきなさい。子どもはまだ若いから言葉も覚えるし、字も読めるようになるから。そういう話を聞かされて、長男だから帰らんといかんかなと。

長男であったN氏は、いずれは故郷に戻って家督を継ぐという自分の使命を自覚していた。スペイン語しか話せない子どもたちを連れて帰ることにためらいはあったが、「万世一系」の一族の継承者としてアルゼンチンの生活を捨てて戻ってきた。しかし、実は帰国の理由は、必ずしもそれだけではなかった。

〔帰国した昭和50年頃、お子さんたちはまだ20歳くらいでしたか?〕

—ええ、アルゼンチンで保証人になった人が倒産して、にっちもさっちもいなくなって、とりあえずこっちに来て、妹の旦那さんが那覇で会社を持っていたので、そのつもりで来て、じゃ、私が出しましょうということで、1万5千ドルもってあっちに戻って。

〔1万5千ドル?〕

—それをもって借金を全部返して、こっちで妹の旦那さんに働いて月々返すということで。みんな戻ってきたんです。

〔借金がふくらんだのはそのお花の仕事がうまくいなくて?〕

—いや。自分たちの事業の、近所の友達の保証をした。その人がモアイするというので、マルコ・パスという自分たちの住んでいた場所で40町の土地を買ったんですよ。私も土地もっていたんですけど、その隣に12町歩の土地があるからというので、こっちに来た方がいいと言われてそこを買って農場を始めたらすぐ、友達は倒産した。その借りがそっちでも払う、モアイも払う。全部で1万5千ドル。その時に沖縄から帰ってこいという話があった。

あの当時1万5千ドルといえは一生遊んで暮らせるくらいの額でした。

友人の保証人になったことで、結果的に大きな負債を負ってしまったために、ちょうど沖縄に戻って来いという要請と、借金の清算をしてくれるという話で帰国を決意したという事情があった。それは、沖縄が日本に復帰し景気が良くなるという期待と、逆にアルゼンチンが深刻な不況と経済破綻に向かう時期に合致していた。N氏は、沖縄に帰っていくつか仕事を変わりながら、故郷の今帰仁でアルゼンチン料理のソーセージを改良して、それまでまったく経験

のない調理の道を開拓して評判をとり、アルゼンチンのネットワークを生かして東京、横浜などのレストランや通販でのソーセージ販売の注文を受け、現在も味の良いソーセージを作る生活を送っている。

***アルゼンチンの生活との比較：**

〔アルゼンチンにいらっしゃる長女の方とは、今も連絡は？〕

—昨日も電話して、いろいろ話して地球の裏にいる人とは思えない。

〔その後アルゼンチンに行かれたことはあるんですか？〕

—去年行きましたよ。もう5,6回。

〔こっちの生活とアルゼンチンを比べるとどうですか？アルゼンチンの生活はそんな悪くないですか？〕

—悪くないですよ。なにしろみんな休みも自由なんですよ。こっちでは一日休んだら給料少なくなるでしょ。あとが困る。あそこでは1週間旅行に行ってもう大丈夫。どうってことないです。

N氏夫妻の語りからは、これまで自分たちが経験してきたアルゼンチンでの生活と、沖縄に戻ってきてからの生活へのさまざまな回顧のうちに、総じて穏やかな肯定の響きを感じた。ただ、現在の沖縄、そして日本の生活に対しては、必ずしも望ましいものとは思えない、という言葉も出てくる。

5. とりあえずのまとめ

ここにあげた2人の事例は、いずれも戦前にアルゼンチンに渡航し生活基盤を築いていた親族を頼って、呼び寄せ移民となった人である。いうまでもなく、そこには戦争という時代の大きな波が強く作用していた。もし、という仮定

は歴史の事実の前には無意味だが、もし戦争がなかったとしたら、あるいは沖縄が激しい地上戦の果てにアメリカ軍に占領され日本から切り離されていなかったなら、沖縄からの移民の軌跡はかなり違ったものになっていたであろうことは、じゅうぶん想像できる。初期のハワイ移民にみられたように、成功を夢見て単身海を越え、「出稼ぎ」として必死で働いて財を得、故郷に戻ってきた成功者の人々のように、沖縄からの「出稼ぎ移民」も多くの成功者の帰還によって、一族は貧しい生活から脱出していたかもしれない。しかし、実際はそうはならなかった。

戦前に海外に出た移民は、日本が世界を相手に戦争を起こしたことで、きわめて難しい状況に立たされた。ブラジルでの「勝ち組」「負け組」紛争にみられるように、祖国日本の側に立てば日本国籍をもつ1世移民は敵国人の扱いを受ける。北米のように収容所への強制隔離はなかったものの、それぞれの国に定着していた日系社会は、生活上の困難に直面した。本部町のアルゼンチン移民の中にも、息子を日本に帰して日本の軍隊に入れる例もあった。しかし、アルゼンチンは戦中の大半が日本と交戦国の関係にはなかったために、日系社会はそのままの生活を続けることができた。ただ、アルゼンチンに残った日系人は、戦争が終わっても帰国はできなかった。沖縄の場合は、さらに日本から切り離されたことで、移民が往来することはきわめて難しい時代が続いた。

ただ、そのことがむしろ戦後の沖縄から南米移民を呼び寄せという形で、積極的に呼び込んだと考えられる。戦争の被害をもっとも強く受けた沖縄本島では、主要な土地を米軍基地に取られ、人々の生活はきわめて苦しいものとなった。米軍上陸の激しい戦火を浴びた本部町の場合も、生活上の困難は想像を絶するものであったと思われる。ここでとりあげたインタビュー

の事例は、たまたま戦前にアルゼンチンに渡航した親族があったことによる特殊性はあるものの、こうした背景は戦後の沖縄本島に共通する性格を帯びているといえるだろう。

本稿では、限られたインタビュー記録から推測できる限りで、このような移民の状況を部分的に推測するに過ぎないが、この2人の生活史にみられる特徴として、移民の経験を経て故郷に帰還した人々の動機に、琉球王朝以来の歴史的伝統への強いアイデンティティが作用していた、という点は、社会学的にたいへん興味深いものである。

とりあえずのまとめとして、この点を簡単に整理しておきたい。

沖縄からの海外移民という研究対象と、戦前から戦後に至る移民の送付・帰還という移動のメカニズムを解明するというわれわれの問題設定にとって、今回の調査インタビューで知ることのできたアルゼンチン移民帰還者の語りは、重要な要因を提供している。琉球列島が歴史的に歩んできた独自の文化的特性は、日本本土からの海外移民といくつかの点で異なる側面を反映している。

日本本土にも長子相続を原則とする「家の原理」が存在した。中世武家社会以来の「イエ」は、中国の血縁血統にもとづく社会編成の論理と似て異なるものがある、ということは社会的にも多くの研究によって指摘されてきた。つまり、中国的な血縁原理では、血の繋がりを重視して家の継承を維持するために「養子」というような制度を実現しないのに対し、日本では中世から直系の血縁以外から養子をとる習慣が一般化していた。中国的な観念では血が家を支えるのに対して、日本では血の継承を尊重しながらも家の維持が優先されるのである。このような「家意識」が、中国文化と日本文化の双方を取り入れた琉球で、どのように展開したか

は、歴史的研究として重要なテーマであるが、ここではまだじゅうぶんに論じるだけの準備がない。

とりあえず、沖縄の南米移民とその伝統的規範意識という限られた研究の視野から、課題としての仮設的論点を3つほど提示して、この報告のまとめとしておきたい。

第1に想定できることは、戦前、戦後を通じて先駆的に南米移民に出た人々は、沖縄本島の共同体的村落の中で、どのような人たちであったのか、を考えてみる。社会階層的な視点からみると、琉球王朝の地域支配の単位である「間切」の士族役人階層である「系持ち」、祖先の系図をもつ一族が、経済的にはともかく社会的威信をもった誇り高い同族意識を持っていたと想定される。そこから明治期末に先導的な移民が出て、南米という土地で同郷者のネットワークを形成し、相互扶助的な協力関係を組織化していった。戦争を挟む30年という期間に発生した呼び寄せ移民の背景に、このような歴史的事情が作用していた可能性がある。ここでその一端を紹介したI氏やN氏の語りからは、そのような一族の子孫としての強い伝統的意識が垣間見える。

第2に考えられるのは、地域土着の農業・漁業生産の担い手であった「百姓」階層からは、海外移民はあまり出ていないという仮説的可能性である。本部町の場合、移民を多く出した地域として、山間部の伊豆味、並里などに対して、海に面した崎本部、山川がある。これはまだ裏付けとなるデータが不足しているので、あくまで仮説に過ぎないが、現地での聴き取りから南米移民に出た一族が、村落の中でどのような位置にあったかが問題になる。少なくとも一家で移民に行くためには、渡航費をはじめかなりの費用を要したことから、村落内の貧困層には移民という選択はなかったのではないかという推

測はできる。若者の単身ならあるいは可能であったかもしれないが、移民は子連れの家族で2カ月近い船旅をする必要があり、金銭と体力に自信のない者には不可能だった。

第3に、異国で安定した生活基盤を獲得した人々が、あえてスペイン語しか話せない第2世代をともなって帰国する理由が、琉球王朝以来の士族のトートーメを守るという歴史的記憶にあるとだけ考えてよいのか、という点である。しかも、10人兄弟の末っ子七男であるI氏の場でいえば、長男が祖先の家屋敷と墓を守るといふ原則からすれば、自分がその役割を引き受ける義務はないにもかかわらず、あえて30年を経て戻ってきたのはいかなる選択であったのか、という点である。その個人的動機については、限られたインタビューで明らかにすることは無理である。しかし、状況証拠としての1980年代アルゼンチンの社会変動を外挿してみると、若干の説明はできるかもしれない。N氏の話からもうかがえるように、日本が経済大国となった1980年代は、かつて日本より経済的に豊かな社会であったアルゼンチンは経済的危機に陥り、軍事政権の圧政によって政治的・社会的混迷に入った。I氏やN氏が帰国を選んだのもこうした時期なのであった。

このような仮説的な説明は、あくまでまだ仮説的な推測にとどまる。今後、さらに調査研究を進める中でその当否を確かめることができれば幸いである。最後に、インタビュー調査にご協力いただいた方々、とくにI氏とN氏には厚く感謝申し上げる。また、自主研究プロジェクトとして援助を受けた明治学院大学社会学部附属研究所に感謝したい。

【註】

- (1) ただし、海に囲まれた日本の場合、政府が関与する集団移民による渡航が主となったため、移

民船の記録はかなりしっかりと残されており、戦前、戦後を通じて、どの時期にどれほどの人々が移民船に乗ったかについては、かなり正確に確認することができる。

- (2) われわれの移民研究の枠組みについては、拙稿(水谷「海外日系移民の定着過程— 沖縄からのアルゼンチン移民の事例に関する覚書」明治学院大学社会学部附属研究所『研究所年報』第39号、2009.3)を参照されたい。
- (3) 移民には渡航の際の条件等から、大別して「自由移民」と「契約移民」の2種類がある。自由移民は船賃を自分で負担し、単独または家族の少人数で渡航し現地での仕事探しも自分でするもので、契約移民は戦前日本の場合、移民会社が現地の農園や鉱山などと契約し、移民者を募集して移民船を用意し集団で移住するものである。
- (4) 間切(まぎり)は琉球王朝時代の市町村にあたる行政区画で、那覇の上級士族に領地として支配され、中世の地頭に当たる役人を親方と呼ぶ。
- (5) 伊野波部落の坂道は、古歌「伊野波節」に伝わる「石くぶり」である。伊野波節：「伊野波の石くぶり、無蔵連れて登る、にやへも、石くぶり、とさはあらな」という歌詞である。
- (6) 現地での日本人の就労した職業については以下の文献に詳しい。(社)在亜沖縄県人連合会『アルゼンチンのうちなーんちゅ 80年史』2004年。アルゼンチン日本人移民史編纂委員会『アルゼンチン日本人移民史』(第一巻戦前編、第二巻戦後編)(社)在亜日系人団体連合会、2002年。
- (7) 琉球処分とは、明治政府が廃藩置県を適用し、琉球王国体制を廃して沖縄県を設置した措置。明治政府は1871年(明治4)に廃藩置県をおこなった際に、琉球王国の体制はそのままに鹿児島県の管轄とした。しかし、琉球が日本に帰属することを明確にするために翌年、王国を琉球藩と改称し国王を藩王とした。琉球は1372年、はじめて明朝時代の中国に入貢したが、この中国との古くからの関係をたちきるために、琉球藩を外務省の管轄として清国との外交折衝にあたらせ、さらに国内同様に版籍奉還、廃藩置県をしようとしたが、琉球側の強い抵抗と清国の抗議もあってすまなかった。

1874年の台湾出兵後の交渉で、清国が日本の

出兵をみとめて賠償金をはらうと、政府は琉球藩を内務省に移管して国内問題扱いとした。翌75年、琉球処分官を派遣してそれまでの清国との冊封関係（→ 冊封体制）を廃止することなどを命じたが、琉球側は全面的に不服で、説得交渉はすすまなかった。西南戦争後、政府は強行策をとる方針にかえ、79年3月軍隊・警官をひきいた琉球処分官が強引に廃藩置県を宣言。翌月、琉球藩を廃して沖縄県とすることが全国に布告され、450年つづいた琉球王国は消滅した。

琉球処分は終了したが、強硬手段に対する反感から何度も紛争が生じ、各種の制度変更への不服従運動や、清国に密航して援助をもとめる動きもでた。清国も、琉球帰属問題では、日本に対して嚴重に抗議したため、アメリカの仲介で1879年から両国間で折衝が開始された。翌80年、日本は八重山・宮古両諸島を清国へ割譲し、かわりに日清修好条規の最恵国待遇の規定を欧米なみに変更する案をだして妥協がなったが、批准にはいたらなかった。琉球の帰属については、その後も長く未解決のままだったが、日清戦争で日本が勝利して日本への帰属が確定した。

- (8) 門中（もんちゅう）とは、沖縄独特の父系親族組織の名称。中国の親族組織と日本の家制度の双方と類似しているが、父系長子相続を基本とする共通の祖先をもつといわれる一字の姓から派生した一族の系図を身分制に結びつける。近世の琉球王国の身分制は系図の有無によって、系図をもつ支配側の士（系持：けいもち）と、系図をもたない支配される側の百姓（無系）に分けられている。官制は、首里の王府を中心に、国王を補佐する摂政（せっせい）、その下に3人の三司官が、さらにその下に表（おもて）十五人という長官クラスの合議機関があり、そこには多くの役人がいて実務をとった。上級の役人は、地方の間切（まぎり）・村を領地とする地頭が占めていた。
- (9) 面接は2009年6月I氏の自宅で行ったが、戦前の沖縄、戦後のアルゼンチン、さらに帰国後の沖縄という大きな変動を生きてきた人生の転機を経験し、歴史のそれぞれの局面を生き抜く中で何を考え、それが今にどうつながっているか、4時間近い面接できわめて印象的に聞き取ることができたが、後で考えてみると聞き逃し

ていること、わからなかったことも多くあった。

- (10) 「門中」は中国、朝鮮、ベトナム、日本など、漢字文化圏の一部にみられる父系の血縁団体のことで、沖縄の「門中」は琉球王朝時代に中国から伝来し、琉球方言では「ムンチュウ」と発音する。士族の場合、共通の姓、名乗り頭（名の最初の一文字）をもつ。門中で共同の墓（門中墓、いわゆる亀甲（カーミースク）墓あるいは破風（ファーファー）墓）をもち、かつては同一の墓に入った。門中の結束は固く奨学金を出し合ったり、託児所を作ったりもする。女性は門中を継げないなど、さまざまな制約をもつが、現在は門中意識は次第に薄まってきているとみられる。

【参考文献】

- 浅野慎一『世界変動と出稼・移民労働の社会理論』大学教育出版、1993年。
- 宇佐美昇三『笠戸丸から見た日本—したたかに生きた船の物語』海文堂、2007年。
- 川島裕『海流—最後の移民船『ぶらじる丸』の航跡』海文堂、2005年。
- (社)在亜沖縄県人連合会『アルゼンチンのうちなーんちゅ 80年史』2004.8。
- (社)日本アルゼンチン協会『日本アルゼンチン交流史』
- 鈴木讓二『日本人出稼ぎ移民』平凡社選書145、1992年。
- Federación de asociaciones Nikkei en la Argentina “Historia del Inmigrante japonés en la Argentina” (eapañol) Tomo1—Período de Posguerra. 2005. (日本語版) アルゼンチン日本人移民史編纂委員会『アルゼンチン日本人移民史』（第一巻戦前編、第二巻戦後編）(社)在亜日系人団体連合会、2002年。
- 真境名安興『沖縄一千年史』（真境名安興全集第一巻）琉球新報社 1993年
- 『沖縄門中大事典』那覇出版社 1998年